



カルナバイオサイエンス株式会社

株主通信

第7期報告書

2009年1月1日～2009年12月31日

キナーゼ、キナーゼ阻害薬とは	P1
2つの事業とビジネスモデル	P3
株主の皆様へ(トップメッセージ)	P5
トピックス	P11
財務諸表	P13
株主の状況/株主メモ	P14
会社概要	裏表紙

次世代創薬に欠かせない「キナーゼ」のエキスパートとして、人々の健康に貢献します。

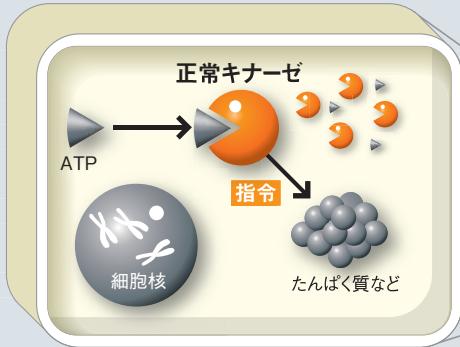


「キナーゼ」と「キナーゼ阻害薬」

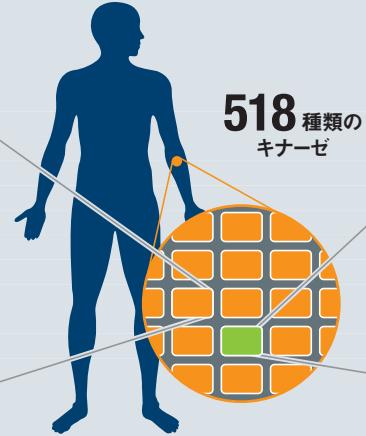
「キナーゼ(プロテインキナーゼ)」とは、生体の細胞内において重要な「指令」の伝達を担っている酵素で、人体には518種類のキナーゼが存在すると考えられており、各々が細胞の増殖・分裂・死などを制御しています。この指令に混乱が生じると細胞の異常増殖や分化が起こり、ガンを始めとする様々な疾患を引き起こします。「キナーゼ阻害薬」は、異常キナーゼの活動を止める医薬品です。

キナーゼ阻害薬によるガン治療は効果が非常に高く、副作用も少ないことから、患者のQOL(生活の質)を高める新しい治療方法として注目されています。

正常な細胞内で

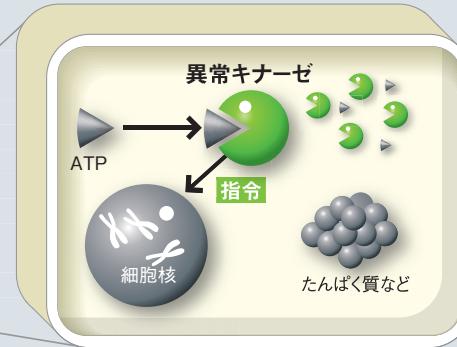


キナーゼはATPという物質と結合し、他の分子に「生命活動に必要な指令」を出す。



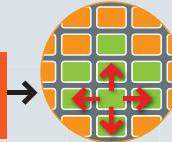
人体は膨大な数の細胞でできており、その1つ1つにキナーゼが存在する。

例えば、ガン(異常)細胞内で

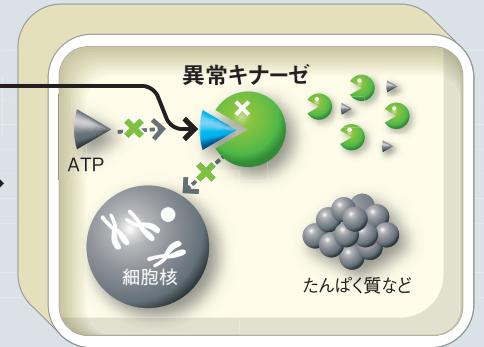


ガン細胞中の異常キナーゼはATPと結合し、細胞核に「ガン細胞を増やす指令」を出す。

ガン細胞が増殖

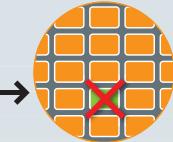


キナーゼ阻害薬の働き



阻害薬がキナーゼに結合し、指令を止める。

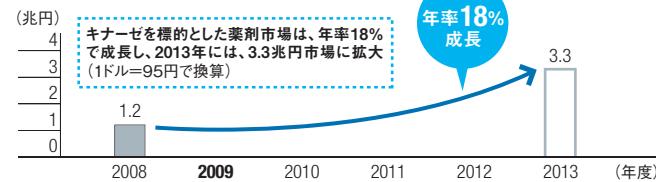
ガン細胞の増殖ストップ



拡大するキナーゼ阻害薬の市場

世界初のキナーゼ阻害薬として2001年に米国で発売された慢性骨髄性白血病治療薬「グリベック」は、高い有効性と安全性によって瞬時に売上を伸ばし、抗ガン剤市場拡大の牽引役となりました。以来キナーゼ阻害薬の研究が全世界で活発化しており、すでに8つのキナーゼ阻害薬が上市され、100以上の新薬候補が臨床試験段階にあります。関節リウマチや喘息など、ガン以外の分野でも有効性が期待されるキナーゼ阻害薬は、世界の創薬研究において最も注目され、急成長を続けている分野であり、2013年には3.3兆円の巨大市場になると予想されています。

キナーゼ阻害薬の市場規模



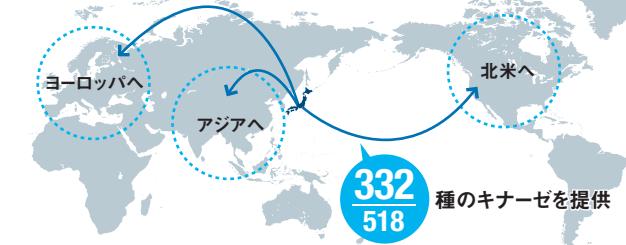
(出所) Report Identifies 608 Protein Kinase Drugs Under Development From 232 Originating Companies during the last decade, approvals for several first-in-class kinase inhibitors have resulted in a wider recognition of kinases as an important class of drug targets

Published on July 30, 2009

研究成果を世界に提供、自社の創薬にも活用

カルナバイオサイエンスは「キナーゼ」に的を絞った医薬品研究を主力事業とするベンチャー企業です。当社ではキナーゼ阻害薬の研究開発に欠かせない高品質の「キナーゼたんぱく質」を多種類(518種中332種/2009年12月31日現在)製品化するとともに、創薬に必要な高度な分析・評価技術を豊富に蓄積しています。これらの製品・サービスを国内・海外の製薬企業などへ販売するとともに、自社での創薬研究にも活用していることが当社の大きな特長です。キナーゼの提供や、分析・評価等のサービスにおいては、国内トップの地位にあり、欧米を始め海外でも着実にシェアを拡大中です。

当社で製造したキナーゼの活用



2つの事業が安定と成長の両立を実現します。

当社はキナーゼ阻害薬を創製する製薬企業へ研究に必要な製品・サービスを提供する「創薬支援事業」と、キナーゼ創薬基盤技術を活用し自社でも新薬開発を目指す「創薬事業」を推進。
2つの柱で「安定」と「成長」を両立させつつ医療の未解決課題に挑戦しています。

創薬支援事業

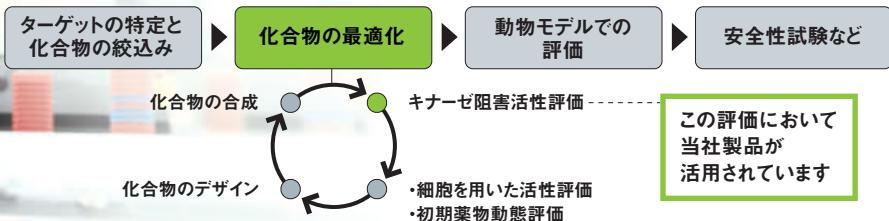
当社では、培った技術を駆使してキナーゼ阻害薬の創薬研究に不可欠である高品質の「キナーゼタンパク質」を多数製品化し、製薬企業を始めとする国内外の顧客に供給しています。製品数は世界トップの332種(2009年12月31日現在)。

また新薬の候補となる成分(化合物)の動きを分析・評価する方法(アッセイ系)を300種以上構築し提供しているほか、顧客の分析・評価プロセスをより簡便化する「アッセイキット」も販売しています。更に新薬の候補となる化合物と各キナーゼの相互作用を網羅的に調べる「プロファイリング・サービス」、特定キナーゼに作用する化合物を当社のアッセイで選り出す「スクリーニング・サービス」等、幅広い技術やサービスで顧客の創薬研究を支援しています。



ビジネスモデル 創薬研究に役立つ製品・サービスを提供

新薬に最適な化合物を選り出すには、高品質のキナーゼタンパク質と、アッセイ系、プロファイリング、スクリーニングといった基盤技術が不可欠。当社はこれらの製品・サービス群で世界トップレベルの「品揃え」を実現しています。現在、国内製薬企業のほぼすべてから製品・サービスを受注しており、更に国内の10倍の市場規模がある海外でも着実に顧客層を拡大中です。



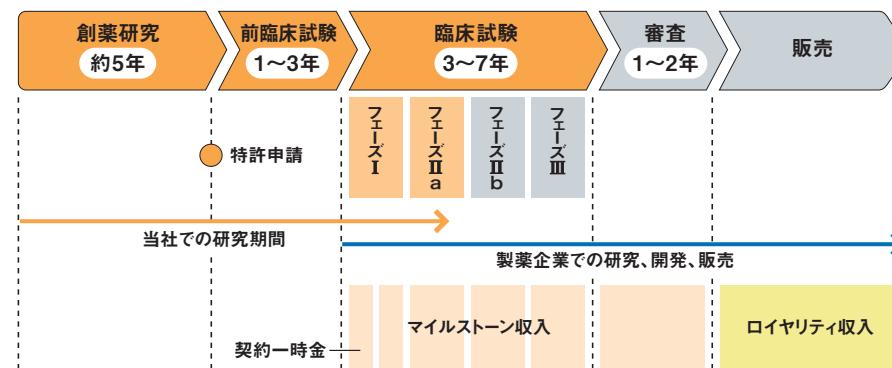
創薬事業

創薬支援事業で用いている高度な創薬基盤技術を自社でも活用し、画期的な医薬品の研究開発に取り組んでいます。社内に創薬ユニットをもつことで、一顧客として品質のフィードバックや新サービスのリクエストを行い、創薬支援事業のサービスの向上にも貢献しています。

創薬事業では、最先端のキナーゼ創薬に関するノウハウを基に、大手製薬企業出身者で構成された優秀なスタッフ陣が本格的に創薬研究に取り組んでいます。その研究能力の高さが評価され、製薬企業やアカデミアとの共同研究を開始しております。

ビジネスモデル 創薬における当社と製薬企業との関係

創薬のプロセスには多くの段階(フェーズ)がありますが、当社が手がけるのはコスト負担の少ない「フェーズIIa」までの段階。そこで開発した新薬候補化合物を製薬企業に導出することで「契約一時金」、各研究・開発段階での「マイルストーン収入」、新薬上市後の「ロイヤリティ収入」を得ていく収益モデルです。



売上、利益とも計画どおりに推移、 早期の黒字化と創薬のステージアップを目指します。



代表取締役社長
吉野 公一郎

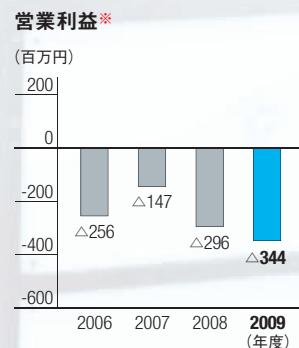
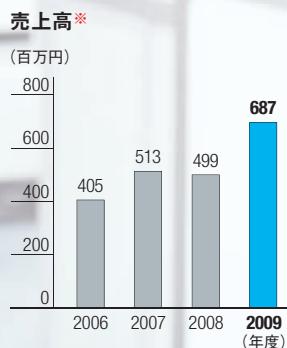
全社の概況

Q 当期(2009年12月期)の総括は?

A 厳しい事業環境の中「創薬企業」に向け着実に前進できました。

昨今のわが国の医薬品業界は、主力製品の特許切れ、政府による後発医薬品の使用促進政策、医療費の抑制政策等、製薬企業にとって厳しい事業環境にあります。こうした変化に対応していくため、製薬企業各社は研究開発品目を絞り込むとともに、バイオベンチャーのM&A等による開発力強化を進めており、新薬開発をめぐる国際競争はますます激化しています。

こうした状況の中で、当社は、売上高687百万円(前年比37.5%



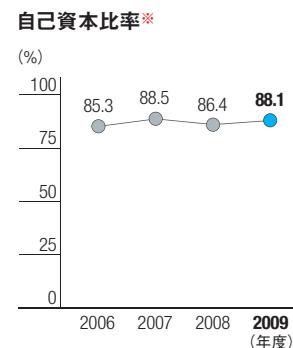
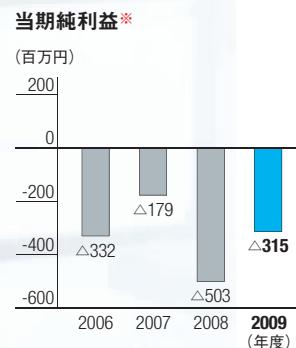
* 2007年度までは非連結、2008年度より連結決算

増)という大幅な売上の伸びを達成しました。現在の厳しい事業環境を考慮すれば、まずまずの業績を上げることができたと評価しています。事業別に見ても、創薬支援事業の売上高が対前年比121.6%、創薬事業の売上高に至っては対前年比330.1%と、両事業とも着実に拡大することができました。特に創薬事業が大きく伸びたことは、「創薬企業」を目指す当社が、未来のあるべき姿に向けて着々と前進している証であると捉えています。

Q 海外での事業展開の状況は?

A 成長の鍵を握る北米市場で販売子会社の黒字化を達成しました。

当期の米国子会社(CarnaBio USA, Inc.)の売上高は161百万円でした。創薬支援事業の売上高に占める海外(北米・欧州等)比率は46.4%で、そのうちの6割を北米市場が占めています。米国では一昨年6月から米国子会社による販売を開始したため、対前年比で示すのはやや難しいのですが、売上は前年から大幅に伸びており、更に当期は損益においても黒字化を達成しました。この米国子会社の黒字化は、当期の大きなピックスの一つだと言えるでしょう。



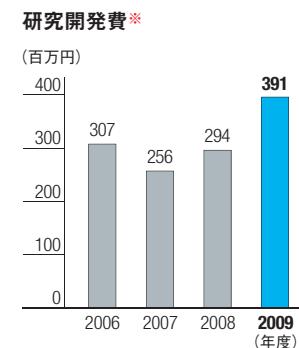
米国の医薬品業界は現在、リーマンショック後の景気後退や医薬品審査の厳格化等を背景に合併・リストラが相次いでおり、各社の研究開発費も削減傾向にあります。しかし、当社においては新規顧客数の伸びだけでなく、各顧客とスポットの取引に加え、契約ベースでの取引も増加しており、北米でのビジネスは着実に拡大しています。海外市場、特にキナーゼ阻害薬の研究開発が盛んな北米市場の持つ重要度は非常に高いものがあります。国内とは違って、北米市場における当社の市場シェアには、まだまだ拡大の余地があり、今後も更なる成長が期待できます。

創薬支援事業

Q 創薬支援事業の実績と評価は?

A 幅広い製品・サービス分野で売上を伸ばすことができました。

創薬支援事業の売上高は560百万円(前年比21.6%増)、営業利益は40百万円(前年は80百万円)でした。製品分野別に見ると、「キナーゼタンパク質」は、北米大手顧客からの大口受注が増加



したことから、312百万円(前年比23.0%増)と、まずまずの好成績を上げることができました。また「アッセイ開発」は、当期に国内営業体制を強化したこと等によって、売上高67

百万円(前年比11.9%増)となりました。

一方「プロファイリング・スクリーニング」に関しては、売上高148百万円(前年比6.8%増)と小幅な伸びに留まりました。

これは顧客である製薬企業を取り巻く市場環境の低迷から顧客の予算執行

が厳しくなり、例年ならば期末・半期末に見込める“駆け込み需要”が大きく減ったことに加え、研究費削減のため多くの顧客がプロジェクトの絞り込みを行ったこと等が影響しています。以上のことより、厳しい環境の中で国内・海外ともよく健闘したと思っています。

Q 創薬支援事業の今後の展開は?

A 顧客志向の姿勢を更に強化し事業効率を高めていきます。

営業面では、特に海外市場における営業力を強化し、製薬企業

との「年間契約獲得」と「新規顧客の開拓」に引き続き注力していきます。海外(北米・欧州等)では着実に顧客数と売上とが拡大しており、国内でも大学等の新たな顧客が増加しています。

北米市場でのシェア拡大のため、今後、西海岸にも拠点を置き、現在の米国子会社と東西で連携をとって、新規顧客を増やし、シェアを伸ばしたいと考えております。欧州についても、専属の人員を採用し、マーケティングに基づいた戦略的な営業活動を行ってまいります。また、最近増えている技術的な問合せにも対応できるよう学術要員を動員し、細やかな顧客へのフォローをしていきます。

また、当期に開始したCrelax社(ドイツ)との代理店契約による結晶化サービスをはじめ、新たな製品・サービスにも国内外から問い合わせが増えており、今後は期待できます。

製品・サービスの面では顧客ニーズに基づいた製品・サービスメニューの拡充を図っていきます。これまではキナーゼタンパク質の製品数(518種中332種を製造)等、どちらかと言えば品揃えの充実すなわち「数」の拡充に力を入れてきましたが、今後は単に「数」を増やすのではなく、市場志向・顧客志向に基づいた「質」の向上に注力していく考えです。顧客ニーズに合致した製品・サービスの開発にリソースを集中させることにより、事業効率を更に高めていきます。

創薬事業

Q 創薬事業の実績と評価は?

A 想定以上のスピードで研究が進み大幅な収入増となりました。

創薬事業の売上高は、126百万円(前年比230.1%増)、営業損失は385百万円(前年は376百万円)でした。この売上高の大幅な伸びは、国立がんセンターとの共同研究等が、想定を上回るスピードで進んだことによるものです。創薬事業では研究の進捗に応じて一定の収入が得られますが、共同研究の進捗が予想以上に好調で、予定していたよりも早期に一定の成果を収められたことが売上増につながりました。創薬事業の場合、各研究テーマの進捗に応じて毎年の売上高が変動するため、必ずしも右肩上がりの成長が続くとは言えないのですが、「創薬企業」を目指す当社にとっては、単年度での売上の伸びよりも、研究がスピードアップできたことが非常に喜ばしい結果だと思っています。

Q 創薬事業の中長期的方針は?

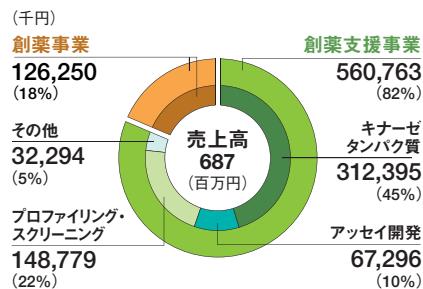
A 最終目標である「自社開発」を目指し創薬研究を進化させていきます。

基本方針は従来通り、「研究テーマ数の確保」と「研究のステージアップ」です。現在の大きな研究テーマは5つあり、4つが共同研究、1つが自社研究によるものです。5つの研究テーマのパイプラインは、すべてほぼ計画通りに進捗しています。今後は各研究の見極めを更に迅速化するとともに、限りあるリソースをタイムリーに再配置し、より成功確率の高いテーマに注力していきます。

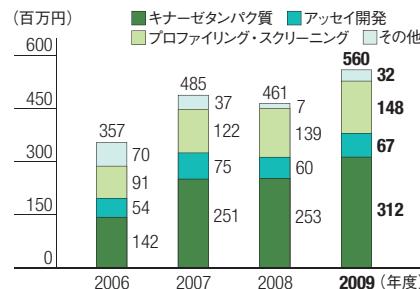
また「自社研究」と「共同研究」のバランスや導出のタイミングも研究の進捗状況や導出価値等を考慮した上で決定していきます。現在は前臨床段階での導出を基本方針としておりますが、これは臨床試験に相当なコストがかかるので、前臨床の完了時点で研究成果を導出し、着実に資金を得て、次の研究に投資する方針をとっているためです。しかし資金にある程度余裕が出てくれば、導出において大きな対価が見込める臨床段階まで、自分たちで手がけていこうと考えています。

一方で「受託研究」という別の展開も視野に入れていきます。例えば大手製薬企業等からリサーチファンド等の研究費をいただき、

セグメント別売上高

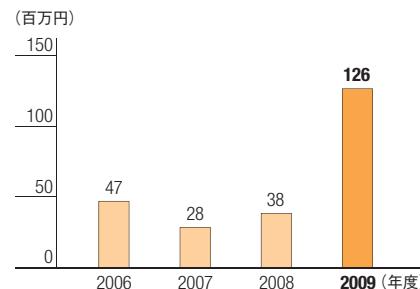


創薬支援事業の商品別売上高推移*



* 2008年度より連結決算

創薬事業の売上高推移*



セグメント別売上高

事業	2008年度		2009年度	
	第2四半期	期末	第2四半期	期末
創薬支援事業	225	461	298	560
キナーゼ・タンパク質	127	253	154	312
アッセイ開発	27	60	54	67
プロファイリング・スクリーニング	63	139	87	148
創薬事業	13	38	20	126

当期におけるステージアップ数及び研究テーマ数

	医薬品開発		
	基礎研究 創薬研究	前臨床試験	臨床試験
計画	5	1	0
実績	5	0	0

創薬研究: 約5年 | 前臨床試験: 1~3年 | 臨床試験: 3~7年

委託されたテーマに関して創薬研究を進めるといったやり方です。ただし自社研究に比べると、受託研究は各段階のマイルストーンも少額で、販売後のロイヤリティ率も低くなります。そのため最終的には、やはり自社で研究・開発した薬の販売によって大きな売上・利益を得ることを目指したいと考えています。「共同研究」→「委託研究」→「自社研究」という形で、創薬事業を段階的に進化させていこうと考えています。

会社の将来

Q 次期(2010年12月期)の市場展望と計画は?

A 市場での優位性を活かし更なる事業の拡大を計画しています。

次期においても、当社グループを取り巻く外部環境は依然として厳しさが続く予測されますが、米国市場の景気は少しずつ上向きに転じてきており、製薬企業の姿勢も徐々に積極化してくると見えています。また画期的新薬に対する医療現場のニーズは高く、中でもキナーゼ阻害薬には国内外を問わず極めて高い注目が集まって

います。このためキナーゼ研究関連の市場は、今後も高い成長を継続することが予測されます。キナーゼ研究分野において当社の提供する製品・サービスの競争優位性は高く、国内外とも顧客数・受注量は、次期も着実に拡大できる見込みです。

これらを総合して、次期は創薬支援事業で連結売上720百万円(前年比128%)、創薬事業で120百万円(前年比95%)、これらを合わせて全体で連結売上840百万円(前年比122%)を見込んでいます。

損益に関しては、連結営業損失321百万円、連結経常損失294百万円、連結純損失304百万円と、売上高の増加により赤字幅が当期よりも縮小する見込みです。

また、次期の研究開発費については、約4億円を計画しています(当期は3.9億円)。なお、当期に国立がんセンターとの共同研究が、独立行政法人科学技術振興機構(JST)の「A-STEP」(トピックス参照)に採択されたので、このA-STEPの助成金を活用して最新の測定機器の導入を予定しています。



Q 収益性(黒字化)についての考えは?

A 革新的バイオベンチャーとしてできる限り早期の黒字転換を目指します。

株主の皆様にご理解いただきたいのは、創業後しばらくの期間は先行投資として研究開発費がかさむことは、創薬研究に取り組むバイオベンチャーの特徴だということです。バイオベンチャー先進国の米国には、現在、時価総額1,000億円以上の企業が30社以上も存在しますが、それらの成功企業は、平均して創業後12年間は赤字、それもある時点からは年間20~50億円という膨大な赤字を計上しています。しかし、それは研究が臨床試験段階に入り、活性化していることの現れであり、研究が成功して画期的な新薬が生み出せれば投資家へのリターンも非常に大きなものとなります。そうした「先行投資型」の事業であることを機関投資家を含む多くの株主様にご理解いただき、資金を提供していただけるからこそ、バイオベンチャーは革新的な研究を進めていけるのです。

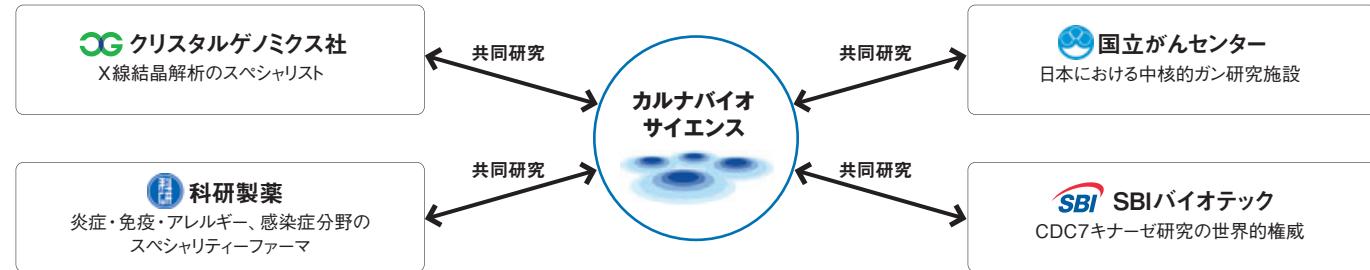
米国の場合は、当社のように安定的にキャッシュを創出できる他の事業を行わず、研究だけに専念するベンチャーも少なくありません。しかし、当社では研究活動と並行して製薬企業の研究に

不可欠な製品・技術の外部提供を行い、その対価で研究費の一部を賄っています。つまり研究費を自分たちでも稼ぐ新しいバイオベンチャーのビジネスモデルとして捉えていただきたいのです。

安定的に利益を出せるまで時間のかかる当社のビジネスをご理解いただき、まだ赤字である当社の株式を購入していただいた株主の皆様には大変感謝しております。われわれはそうした株主様のおかげで薬作りに励めるのです。今後も研究領域の「選択」と「集中」による収益性向上を更に追求するとともに、一刻も早く革新的な新薬を創出し、全社の黒字転換を実現できるよう、努力を続けてまいります。株主の皆様には、引き続き温かいご支援をお願いいたします。

2010年3月
吉野 公一郎

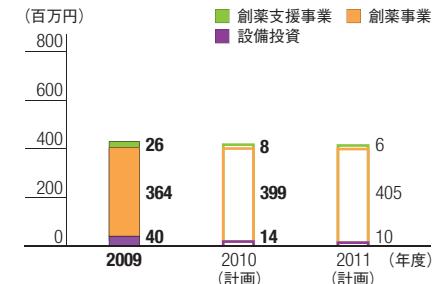
双方の強みを活かした共同研究



セグメント別売上高営業利益計画及び目標

(百万円)	2009年度	2010年度(計画)	2011年度(目標)
売上高	創薬支援事業 560 創薬事業 126	720 120	801 400
営業利益	創薬支援事業 40 創薬事業 △385	104 △425	192 △151

研究開発費及び設備投資計画



今後のステージアップ数及び研究テーマ数の計画及び目標

	基礎研究 創薬研究			医薬品開発		
	創薬研究 約5年	前臨床試験 1~3年	臨床試験 3~7年			
2009年度	5	0	0			
2010年度(計画)	5	1	0			
2011年度(目標)	5	2	0			

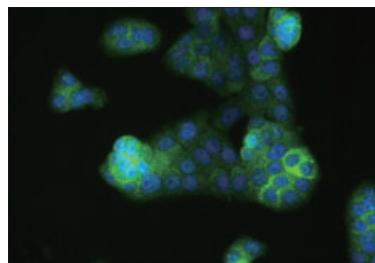
1 2009年12月2日 国立がんセンターとの共同研究が科学技術振興機構の「A-STEP」に採択されました。

当社が国立がんセンターと共同で進めてきたWntシグナル伝達を遮断する大腸ガンの新規治療薬の研究が、その実現性、画期性などが評価され、独立行政法人科学技術振興機構の運営するA-STEP(研究成果最適展開支援事業)の採択課題「シース育成タイプ」に決定しました。本テーマの対象疾患であります大腸ガンは、生活習慣の欧米化が進んでいることで近年増加傾向にあり、日本国内だけでも毎年約4万人が死亡しており、新たな治療薬の開発が非常に望まれています。

大腸ガン患者の8割以上は、Wntシグナルと呼ばれる経路に存在する、APC(adenomatous polyposis coli)ガン抑制遺伝子に変異があることが知られています。このAPC遺伝子の変異によって、下流のβ-カテニンの分解に異常が生じ、その結果、蓄積したβ-カテニンが遺伝子の転写活性化をもたらすことで、発ガンを引き起こすと考えられています。これまでも、世界中の研究機関がWntシグナル伝達経路を遮断する薬の開発を目指してきましたが、

有効な標的分子を見出すことができませんでした。本共同研究で標的としているWnt-Kは、国立がんセンター研究所の山田先生らがプロテオミクスと呼ばれる技術を駆使して、新規に発見したWntシグナル伝達経路に重要な役割を果たしているキナーゼであり、現在、当社の優れたキナーゼ創薬技術を用いて日本発の画期的大腸ガン治療薬の開発に取り組んでいます。

大腸ガン治療薬の市場は、国内で約600億円、全世界で、約6,000億円と推測されています。



大腸ガン細胞を用いた
合成化合物のスクリーニング

キナーゼ阻害薬の開発行程



1 ハイスクリーンスクリーニング
(HTS)によるヒット化合物の同定



2 CADDシステムによる
合理的な化合物の設計
CADD: Computer-Aided Drug Design



3 デザインした化合物の化学合成



4 自動分取LCMSシステムによる化合物の精製



5 高感度NMRによる化合物の構造決定
NMR: nuclear magnetic resonance
(核磁気共鳴分光法)



6 合成した化合物の
キナーゼ阻害活性の評価

2 2009年6月23日 科研製薬株式会社とキナーゼ阻害薬の創製に関する共同研究を開始しました。

当社と科研製薬株式会社は、2009年6月、創薬研究において最も注目される分子標的治療薬の共同研究について契約を締結し、同7月から共同研究を開始しています。科研製薬の保有する医薬品研究における豊富な知見と、当社の強力なキナーゼ創薬技術

を組み合わせ、最速でのキナーゼ阻害薬の創製を目指していきます。本共同研究の締結は、当社の医薬品研究レベルの高さが製薬企業からも認められた結果であり、当社の創薬事業成長の一つの布石として大きな成果と考えております。

3 2009年8月12日 SBIバイオテック株式会社とガン治療薬の共同研究を開始しました。

当社は2009年8月、バイオベンチャー企業であるSBIバイオテック株式会社と「CDC-7キナーゼを標的分子とするガン治療薬の創製」を目的とした共同研究を開始しました。ガン細胞は、通常の細胞よりも頻りに細胞分裂を繰り返しています。CDC-7キナーゼは、細胞分裂途中で起こるDNA複製に関与しているキナーゼで、ガン治療における標的分子として注目されています。パートナーでありますSBIバイオテックは、CDC-7キナーゼ研究において世界の第一人者であり、

その最先端の知見と当社のキナーゼ創薬技術を組み合わせることで、最速でのCDC-7キナーゼ阻害薬の創製を目指していきます。



連結貸借対照表

(単位:千円)

科目	前連結会計年度 2008年12月31日現在	当連結会計年度 2009年12月31日現在
(資産の部)		
流動資産	1,705,308	1,760,363
現金及び預金	831,545	1,290,716
売掛金	36,426	127,104
有価証券	700,586	200,000
その他	137,247	142,573
貸倒引当金	△ 499	△ 32
固定資産	365,493	283,546
有形固定資産	203,715	115,193
無形固定資産	24,000	26,957
投資その他の資産	137,777	141,395
資産合計	2,070,801	2,043,910
(負債の部)		
流動負債	269,216	168,818
買掛金	2,105	2
1年内返済予定の長期借入金	—	7,992
未払金	135,689	88,663
未払法人税等	4,533	5,619
その他	126,889	66,541
固定負債	12,389	73,827
負債合計	281,605	242,645
(純資産の部)		
株主資本	1,795,488	1,800,465
資本金	1,964,570	2,125,632
資本剰余金	513,787	673,100
利益剰余金	△ 682,869	△ 998,266
評価・換算差額等	△ 6,293	798
純資産合計	1,789,195	1,801,264
負債純資産合計	2,070,801	2,043,910

POINT 1 資本金・資本剰余金

公募増資等による資金調達を行い、資本金、資本剰余金がそれぞれ161百万円、159百万円増加いたしました。

POINT 2 売上高

創業支援事業の売上が国内及び米国を中心として順調に伸長(前年度に比較して99百万円増)するとともに、創業事業の売上が共同研究の進捗により増加(前年度に比較して88百万円増)しました。その結果、売上高が前年度に比較して187百万円増加しました。

連結損益計算書

(単位:千円)

科目	前連結会計年度 2008年1月1日から 2008年12月31日まで	当連結会計年度 2009年1月1日から 2009年12月31日まで
2 売上高	499,570	687,013
売上原価	122,990	215,768
売上総利益	376,579	471,244
販売費及び一般管理費	672,844	815,523
3 営業損失(△)	△ 296,264	△ 344,278
営業外収益	7,386	5,751
営業外費用	57,735	11,264
経常損失(△)	△ 346,614	△ 349,791
特別利益	—	43,744
特別損失	155,421	7,006
税金等調整前当期純損失(△)	△ 502,035	△ 313,053
法人税、住民税及び事業税	1,004	2,344
4 当期純損失(△)	△ 503,039	△ 315,397

連結キャッシュ・フロー計算書

(単位:千円)

科目	前連結会計年度 2008年1月1日から 2008年12月31日まで	当連結会計年度 2009年1月1日から 2009年12月31日まで
営業活動によるキャッシュ・フロー	△ 267,673	△ 419,603
投資活動によるキャッシュ・フロー	△ 313,874	83,864
財務活動によるキャッシュ・フロー	813,102	392,824
現金及び現金同等物に係る換算差額	△ 451	1,498
現金及び現金同等物の増減額	231,102	58,583
現金及び現金同等物の期首残高	1,201,029	1,432,132
現金及び現金同等物の期末残高	1,432,132	1,490,716

POINT 3 営業損失

売上高が増加したものの、創業研究への積極的な投資による研究開発費の増加を主要因として販売費及び一般管理費が増加しました。その結果、前年度に比較して赤字幅が48百万円拡大しました。

POINT 4 当期純損失

前年度は、株式公開費用及び研究開発拠点並びに本社移転に係る費用が発生し、営業外費用及び特別損失が大きく膨らみました。一方、当年度は、特別利益として受取補償金が発生したため、損益が大きく改善し、前年度に比較して赤字幅が187百万円縮小しました。

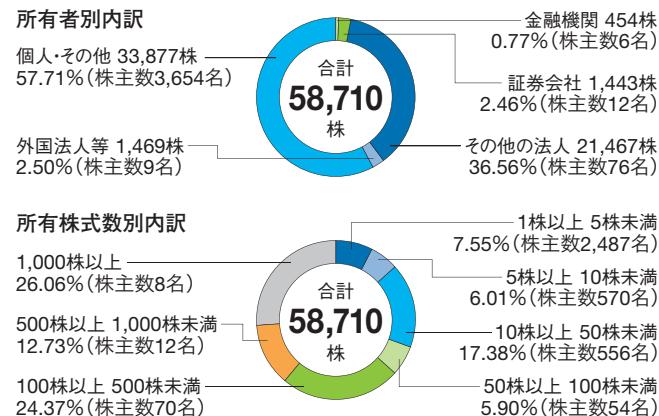
株主の状況

発行可能株式総数	300,000株
発行済株式の総数	58,710株
株主数	3,757名

大株主

株主名	持株数(株)	持株比率(%)
ジャフコ・バイオテクノロジー 1号投資事業有限責任組合	3,138	5.3
CSK-VC ライフサイエンス 投資事業有限責任組合	2,853	4.9
バイオ・サイト・インキュベーション 1号投資事業有限責任組合	2,739	4.7
吉野 一郎	2,000	3.4
ジャフコ V2 共有投資事業有限責任組合	1,540	2.6
シーエスケイブイシー 三号投資事業有限責任組合	1,035	1.8
クリスタル ゲノミクス インク	1,000	1.7
バイオ・サイト・インキュベーション 2号投資事業有限責任組合	1,000	1.7
東山 繁樹	980	1.7
津木 憲紘	800	1.4

株式・株主分布



株主メモ

事業年度	毎年1月1日から12月31日まで
定時株主総会	毎年3月開催
基準日	毎年12月31日
上場証券取引所	ジャスダック NEO
証券コード	4572
株式の売買単位	1株
公告方法	電子公告により、当社ホームページに掲載いたします。 http://www.carnabio.com/japanese/ir/notification.html ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載します。
株主名簿管理人および特別口座の口座管理機関	大阪市中央区北浜四丁目5番33号 住友信託銀行株式会社
株主名簿管理人事務取扱場所	東京都中央区八重洲二丁目3番1号 住友信託銀行株式会社 証券代行部
(郵便物送付先)	〒183-8701 東京都府中市日鋼町1番10 住友信託銀行株式会社 証券代行部
(電話照会先)	☎ 0120-176-417
(インターネット/ホームページURL)	http://www.sumitomotrust.co.jp/STA/retail/service/daiko/index.html

■ 特別口座について

株券電子化前に「ほふり」(株式会社証券保管振替機構)を利用していなかった株主様には、株主名簿管理人である上記の住友信託銀行株式会社に口座(特別口座といいます。)を開設いたしました。特別口座についてのご照会および住所変更等のお届出は、上記の電話照会先をお願いいたします。

会社概要

商号	カルナバイオサイエンス株式会社
設立	2003年4月10日
資本金	21億2,563万円 (2009年12月31日現在)
事業内容	創薬支援事業：キナーゼタンパク質、アッセイ開発、 プロファイリング・スクリーニングサービス 等の製造・販売 創薬事業：キナーゼ阻害薬の研究・開発
従業員数	48名 (2009年12月31日現在)
所在地	神戸市中央区港島南町1丁目5番5号 BMA 3F
上場市場	ジャスダック証券取引所NEO市場(証券コード4572)

海外子会社

商号	CarnaBio USA, Inc.
代表者	原 隆 (当社取締役営業本部長)
所在地	米国マサチューセッツ州、ネイティック(ボストン市近郊)
主な業務内容	北米における創薬支援事業
資本金	400千米ドル

役員 (2010年3月24日現在)

代表取締役社長	吉野 公一郎
取締役	相川 法男
取締役	原 隆
取締役	横田 耕一
取締役(社外)	柳原 恒久
常勤監査役(社外)	有田 篤雄
監査役(社外)	小笠原 嗣朗
監査役(社外)	中井 清



本社(BMA 3F)

カルナ<CARNA>の由来

当社の社名である「カルナ(Carna)」はローマ神話の「人間の健康を守る女神」です。また「身体の諸器官を働かせる女神」などとも言われています。

当社は生命科学「バイオサイエンス(Bioscience)」を探究することで「人々の生命を守り、健康に貢献することを目指す。」ことを基本理念としています。

当社はまさに「カルナ(Carna)」でありたいと思っています。



ホームページで最新IRニュースを発信しています

トップページ



IR情報ページ



「IR情報」ではIRニュースを掲載しています。また、「IRお問い合わせ」のページでご意見・ご質問などをお受けしております。

IRニュースメール新規会員登録
ただいま会員募集中

最新のIRニュース、IR情報をメールでお知らせするサービスです。ぜひ、ご登録ください。

カルナバイオサイエンス株式会社

〒650-0047

神戸市中央区港島南町1丁目5番5号 BMA 3F

TEL 078-302-7039(代表) FAX 078-302-6665(代表)

URL <http://www.carnabio.com/japanese/>



この冊子は地球環境保護のため、大豆油インキで印刷しています。